

編集・発行：三重県環境生活部新博物館整備推進プロジェクトチーム

ともに考え、活動し、成長する博物館にむけて

・みんなでつくる博物館会議を開催しました！
…P1

・！新県立博物館の建物完成間近！～建築物ができるまで～
…P2～P3

・新博のみっちゃん
…P3

・基本展示室のみどころ紹介
…P4～5

・新県立博物館には驚きがいっぱい博物館を歩いてみよう
…P6

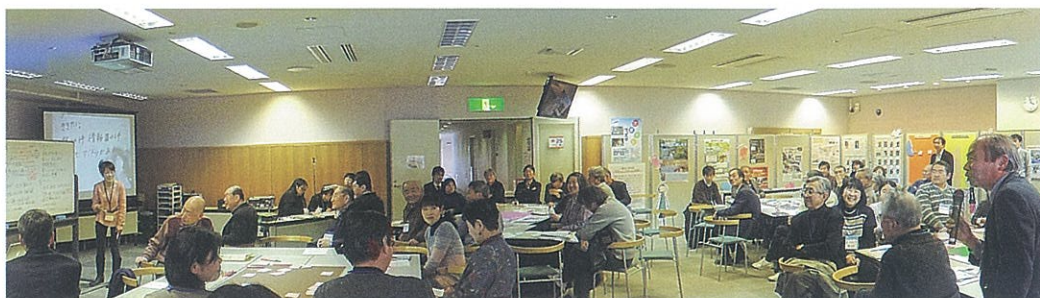
・ただ今 調査研究と資料収集をしています
…P7

・大学連携 皇學館大学との覚書調印式
…P8

・里山ゾーンの子ヤマガラ
…P8

「みんなでつくる博物館会議」を開催しました！

The conference for making our museum friendly



会場全体

「利用者と博物館の関わり方」をテーマに、2月10日(日)、県総合文化センターで開催し、61名の参加でした。最初に兵庫県立人と自然の博物館の八木剛さんの講演があり、博物館利用者が主体的に活動することで、博物館ならではの楽しい方法で自分がやりたいことを実現できたり、博物館が主催ではなかなかできないイベントを利用者団体が主体的に実施したりなど、利用者が博物館を盛り上げている事例を発表していただきました。

その後4つの少人数のグループに分かれて意見交換をし、そこで出た意見をもとにして全体で議論をした結果を、参加者の声として次のようにまとめました。

- 1) 誰でも、自分のやりたいと思うような活動ができる博物館にしてほしい。
- 2) 20～30代の若者が利用しやすいように、ボランティアを活用できる体制をつくり、サブカルチャーを展示するなど、デートスポットにもなるように取り組んでほしい。
- 3) 誰もが楽しめるように、障がい者も参画しながら一緒にソフト面の対応マニュアルやその研修、および日々の声に応える仕組みをつくってほしい。

新県立博物館では、これらの意見を大切にしながら、開館後の事業や運営の計画をつくり、利用者の興味や年齢に応じた様々な参加の入り口を用意していきます。(北村 淳一)



グループ討論



講師の八木剛さん

！新県立博物館の建物 完成間近！ ～建築物ができるまで～

The New Museum approaching completion ~ Until Completion ~



平成 25 年 2 月 5 日現在の建築工事の状況

掘削

—着工～化石調査—

建築工事は平成 23 年 1 月末に、地面に基礎を構築するための掘削に着手しました。この時、化石の存在が予見されていた地層が出てきました。施工者の協力の下、3 月に 1 次発掘調査を、5 月には 2 次発掘調査と合わせて化石発掘調査体験イベントを行い、ミエゾウの足跡をはじめ、シカの角、ワニの歯、スッポンの甲羅、貝、植物などのたくさんの化石が産出しました。写真は、ミエゾウの足跡化石を発掘している様子です。



化石調査の様子

基礎

—基礎・免震—

平成 23 年 8 月。基礎マットスラブが打ち上がり、免震装置を据え付ける作業に入りました。新県立博物館では建物全体を免震構造とする総免震としており、1 階の床下に免震ピットを構築し、各柱の直下に免震装置（鉛プラグ入り積層ゴム支承）を配置しました。免震装置により、普通の建物に比べ、地震時の揺れを低減させることができ、利用者・職員の安全はもちろん、貴重な収蔵品や展示している資料の保護に貢献します。



免震装置据え付けの様子

構造体

—建方・コンクリート—

平成 23 年 10 月。免震ピット層～1 階床スラブまでの構築が完了し、構造体となる鉄骨鉄筋コンクリート構造（SRC 造）の鉄骨建方工事が始まりました。施工者の創意工夫により、鉄骨にはあらかじめ鉄筋と足場を組み付けておくことで、鉄骨の組立て後の作業高効率化・安全性向上を図った施工を行いました。建方の完了後、下階から順次柱・梁・構造壁・床スラブのコンクリート打設を行い、平成 24 年 6 月に打設が完了しました。



鉄骨建方の様子

屋根

—二重屋根・太陽光—

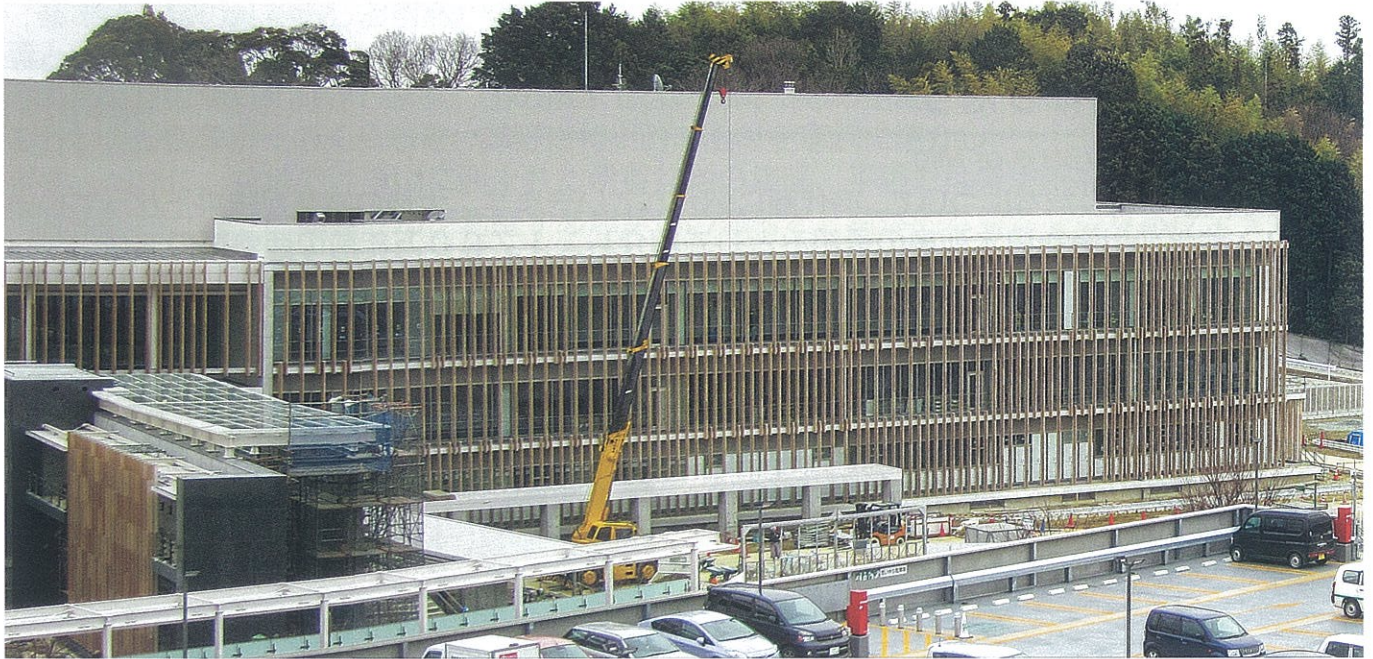
平成 24 年 9 月。アスファルト防水が完了した収蔵庫屋上スラブの上に断熱のため、さらに現場にて成型機を用いて鋼板から加工することによる、長さ 50 m の継ぎ目がない、仕上がりの美しい折版を葺き、二重屋根としました。継ぎ目がないことは止水面においても有効です。

平成 24 年 11 月には、この折版屋根上に公称出力 100 kW の太陽光発電パネルを設置し、自然エネルギーの積極的な利用に努めています。



折版屋根と太陽光パネル

いよいよ竣工となる4月が間近となりましたが、今後も、現在進捗中の外構工事のほか、展示工事や現博物館から新博物館への移転作業をはじめとする準備が鋭意進められる予定です。



仕上がり
—内装・外装—

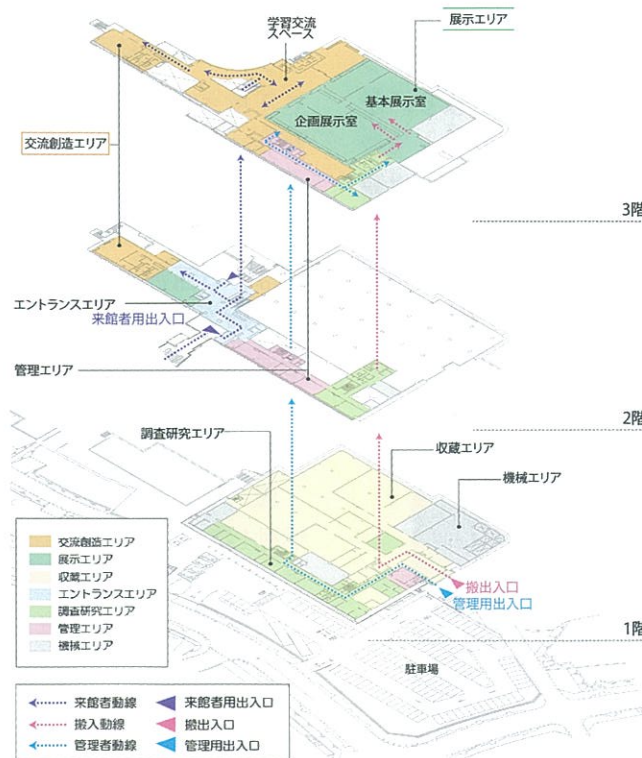
平成24年5月に内装工事に着手しました。内装においては、県産木材を可能な限り使用することに努め、収蔵庫の床・壁・天井、木製ラック、フローリング等の各所にヒノキ・スギ材を使用しています。学習交流スペース（下写真）では、壁部分の練り付け材が県産木材です。外装においては、テラコッタルーバーを北西面に配置することで、日射遮断機能と街道沿いの町屋の縦格子をイメージした三重らしさを持っています（上写真）。



内装工事の様子

竣工
—完成とその後—

竣工後は、基本展示室・企画展示室を中心とする諸室で開館に向けた準備を進めていきます。まだ中には入館すること



施設構成図

とができませんが、建物の外観をご覧いただくことで新しい博物館の整備が着々と進んでいることを実感いただけるものと思います。（田畑 衛）



基本展示室のみどころ紹介

The new exhibition area's points of interest

このページでは、新県立博物館のさまざまなコーナーの魅力についてシリーズで紹介していきます。



三重の大地のなりたち

The geological origins of Mie

三重の大地のなりたちについて、時代順に紹介していきます。大地の基盤が出来上がっていった、約3億年前以降を日本列島の骨組みとして紹介し、1700万年前の亜熱帯の海が広がっていたころ、数百万年前のゾウが棲んでいたころ、そして現在の三重の大地のすがたを紹介します。

今回は、「三重の大地のなりたち」の前半部分、日本列島の基盤が出来上がっていった様子を展示する「日本列島の骨組み」の内容について紹介します。

付加体

日本の太平洋側には、海溝が発達し、海洋プレートが沈み込んでいます。この海洋プレートは、海底火山の残骸やその周辺に発達したサンゴ等の化石を含む石灰岩、海底に降り積もった堆積物等を載せ、1年に数cm程度のゆっくりしたスピードで移動し、数千万年かけて、現在の日本列島付近までやってきました。これらは、一緒に海溝に巻き込まれ、一部は大陸の縁に付け加わってきました。実は、日本列島全体の基盤はこのようにプレートに乗ってきた様々な岩石が陸側に付け加わ

ってできたもので、これを「付加体」といいます。

メランジュ

鳥羽市浦村町砥谷海岸には、黒い泥の固まった「泥岩」の中に様々な岩石が含まれています。緑色で変形した「緑色岩」、灰色でセメントの原料になる「石灰岩」、火打石などにも使われた非常に硬い「チャート」、砂が固まった「砂岩」などです。付加体の多くは、砂岩や泥岩が交互に積み重なる部分からできていますが、一部にバラバラになった岩石が混ざった部分があり、これを「メランジュ」といいます。砥谷海岸でみられるメランジュは、日本列島の基盤がプレートで付加されてできたことを示す一つの証拠です。

中央構造線

松阪市飯高町月出付近から宮川河口付近を境界



月出の中央構造線

に、南北で全く異なった状況で変成した岩石が隣り合っています。これらの岩石は、付加体の一部がプレートの動きによって圧縮されたり、マグマが発生したりすることにより、変成を受けたものです。北側の嶺家帯の岩石は、6百数十度の温度で、地下10数km程で形成された「片麻岩」とマグマが固まったゴマ塩模様の「花崗岩」で、1億~7千万年前ごろに活動したマグマとその熱で変成した岩石です。一方、南側の三波川帯は、4百度近くの温度で、地下20数kmで形成された「黒色片岩」などの変成岩です。これらの岩石

の境界は、「中央構造線」と呼ばれ、西は九州から東は房総半島まで千km以上続く西日本を分断する大断層です。現在の中央構造線は、海面下に沈んでいたり、折れ曲がったりしていますが、もともと1億年ほど前に、大陸の東縁部に、南からきた海洋プレートの動きに引きずられて割れ目が生じ、アジア大陸の東縁に発達した巨大断層だったと推定されています。一部は現在まで動き続けています。月出では、最大規模の中央構造線の露頭がみられます。

(中川 良平)



砥谷海岸のメランジュ (変形した緑色岩)

くらしと自然

Relations between people and the environment

基本展示室の「くらしと自然」のコーナーでは、山・盆地・平野・磯という4つの特色ある環境を取り上げ、そこにくらす人びとと自然との関わりについて紹介します。山の展示では、いくつもの生業を組み合わせ合わせた四季折々のくらしを、熊野市神川町の山村を事例に紹介します。同様に、盆地では里山に囲まれた伊賀盆地の集落、平野では条里制の地割が残る櫛田川流域の農村、磯では海女さんが活躍する志摩市の漁村と、具体的な集落を取りあげます。地域にくらす人びとの姿を通して、県内の多様な環境のもとで営まれるくらしぶりを伝え、来館者がこれからのくらしを考える機会としたいと考えています。(門口 実代)



こうした「くらしと自然」の展示に関する調査と並行して、平成23年度から「三重のくらしの写真収集プロジェクト」(本年度は「三重のくらしの古写真収集事業」)を行っています。

これは、広く県民の皆さんに協力を呼びかけて、衣・食・住、仕事、遊び、まつりなど、三重県内のくらしに関する古写真を集めようという試みで、このプロジェクトを通じて集めた写真を、新県立博物館の活動に活かしていこうというものです。募集する写真の時期は、明治時代から昭和40年代までを対象としています。写真の収集は、提供いただける原本(フィルムやプリント)を一旦お預かりし、スキャナー等によってデジタルデータを作成した上で、原

本をお返しするという方法をとっています。

新県立博物館の活動に限った画像の使用を想定しており、これらの画像をデータベース化し、写真資料として誰もが閲覧利用できるとともに、基本展示室の「くらしと自然」のコーナーや企画展示等でも、みんなで集めた資料収集の成果として紹介していくことを計画しています。

収集の具体的な方法としては、ポスターやチラシを作成して広く募集を呼びかけると共に、どのような写真を集めているのかという、わかりやすいイメージを伝えて協力を呼びかけるために「三重のくらしの古写真パネル展」を県内5カ所で開催しました。昨年度は、地域の皆さんに利用されている図書館や博物館と

いった文化施設を中心に行いましたが、本年度はそれに加えて県内の企業に御協力をいただき、ショッピングセンターや温泉施設といった、これまでにない新たな施設でもパネル展を開催することができました。

このほか、県内各地域のケーブルテレビとも連携し、プロジェクトの趣旨やパネル展示案内についての放送をしてもらうなど、出来る限り周知を図りました。

その結果、家庭に眠っている古いアルバムの提供が多くあり、アルバム台紙に丁寧に貼られた写真と、それに関する注記からは、当時のくらしの様子や家族の歴史を感じ取ることができます。時には、提供者のご自宅に伺うこともありました。直接お会いしてお話を聞

くことで、時期や場所、被写体などの写真に関連する情報を確認できました。

また、地域のアマチュア写真家の方からも、数多くの写真をご提供いただきました。これらは、主にカメラが普及する昭和30年代のものが中心で、町並みや子供たちの遊ぶ姿、まつりの風景など、今では見ることで見えない貴重なものがあります。

昨年度から現在に至るまで、およそ4,000点を超える写真が集まっていますが、これらの写真を「くらしと自然」のコーナーでどのように展示活用していくことができるか、検討を行っています。(瀧川 和也)



ちやぶ台



紙芝居



新県立博物館には驚きがいっぱい 博物館を歩いてみよう

Come discover delightful surprises! Walk through the New MPM

このコーナーでは新県立博物館の魅力ある空間、展示室、収蔵庫などをシリーズで紹介していきます

オオサンショウウオの生態展示

Exhibit of a living Japanese giant salamander

三重県立博物館では、国の特別天然記念物であるオオサンショウウオを飼育・展示公開しています。新しい博物館では、オオサンショウウオが間近に見られる大きな水槽があり、実際にオオサンショウウオを観察しながら、水槽横のモニターで生態や保護の取り組みなどについて知ることができます。

オオサンショウウオって!?

オオサンショウウオは日本固有種で岐阜県より西の本州と四国、九州の一部の河川に生息しています。現存している両生類の中では最大級の大きさです。体の形態が約3000万年前からほとんど変化していないことから「生きている化石」と呼ばれることもあります。昭和27年(1952年)に国の特別天然記念物に指定され、大切に保護されています。

新しい水槽のしくみ

水槽内の水温を一定に保つことができ、オオサンショウウオの生息域の水温に近い状態を維持することができます。

また、水を循環させながらろ過することで、常にきれいな水を水槽内に供給し、オオサンショウウオにとってすみやすい環境になるよう工夫しています。

観察しやすい工夫

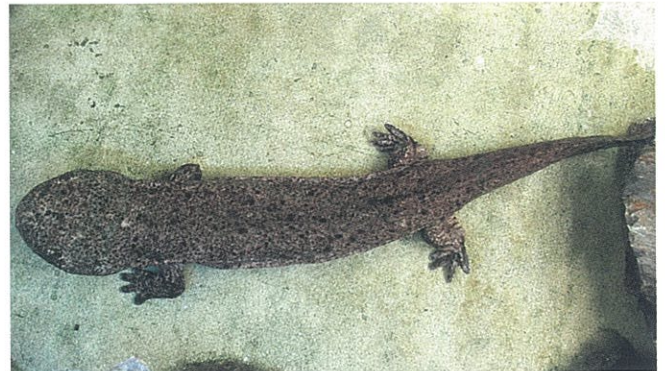
オオサンショウウオは夜行性で昼間は川の石のすき間や巣穴にひそんでじっとしてほとんど動くことはありません。

このような生態をもつオオサンショウウオを来館者の方々にじっくり観察していただけるよう、水槽には工夫があります。水槽を床から60センチ上げたところに設置し、底にいるオオサンショウウオが目線の高さで観察できるようになっています。

また、オオサンショウウオがストレスを感じずに過ごすことができるように、隠れ家となる岩のくぼみなどを擬岩でつくってありますが、水槽面のうち2面が水中まで続くガラス張りになっていて、オオサンショウウオが隠れている様子をよく観察することができます。オオサンショウウオと観察する方々の双方に快適な飼育空間を目指しています。

博物館の人気者

現在飼育中のオオサンショウウオは、平成4年(1992年)に名張市美旗おぼたがわの小波田川にいるところを発見され保護されました。以来、さんちゃんさんちゃんと名付けられ、21年間、現博物館の中庭にある飼育水槽で展示、公開され



さんちゃん

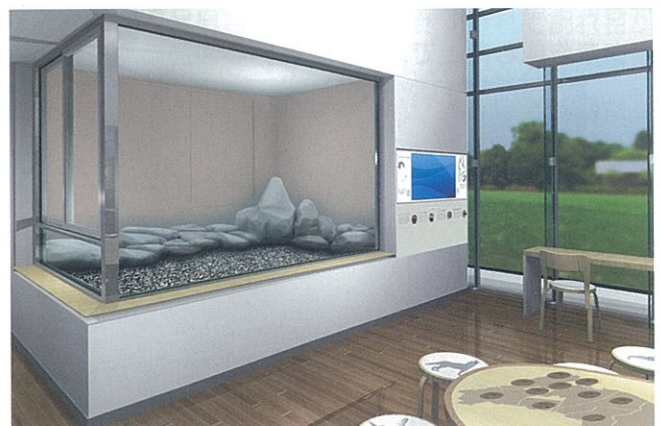
ています。毎月第2土曜日には、さんちゃんの給餌を公開し、参加者の方にも餌やりを体験してもらっています。毎回、たくさんの方にお越しいただき、さんちゃんが勢いよく魚に食いついて、丸飲みする姿を楽しんでいただいています。

面に1か所、窓が設置してあります。この窓から、これまで公開し、好評を得てきたお食事会を継続していきます。もちろん見学者のみなさんにも実際に体験していただく予定となっていますので、どうぞお楽しみに。

(田村 香里)

新水槽でも給餌の公開は継続します!

新県立博物館の飼育水槽には、ガラス面の観察



水槽パース図

ただ今 調査研究と資料収集をしています

Research, Investigation, Collection – Forming a reputable museum

三重の食文化を調べています

Research with children about the food culture “OSECHI” in Mie

みなさんのお家では、お正月にどんなおせち料理を食べますか？田作りや数の子、黒豆といった定番の料理に加えて、ローストビーフや焼き鯛など、わが家の自慢の一品があるかもしれません。

博物館では今回、三重県のおせち事情を子どもたちと一緒に調べようと、「おせち料理プロジェクト～新博ティーンズプロジェクト PART IV～」を企画しました。昨年度のお雑煮に続いて、みんなで地域の食文化を調べようという取組の第2弾です。お雑煮に比べて、おせち料理は品数

も多いので、子どもたちに興味を持ってもらえるのか不安がありましたが、年明けから調査カードが続々と博物館に届けられ、なんと2,800枚近くものカードが集まりました。

調査カードは、これから時間をかけて分析をしていきますが、料理の写真や手描きのイラストを見ているだけでも、わくわくした気持ちになります。手作りにこだわっている家もあれば、デパートで重箱に入ったおせち料理を買う家、おせち料理はつくりたくないという家も少数ながらありました。



おせち調査カード

また、元旦の夜にはすき焼きや焼き肉をするというのも、新しい習慣になりつつあるようです。

3月3日（日）に県総合文化センターの大研修室で行ったおせち料理交流会では、今回の調査結果を速報としてお伝えしました。また、参加した子どもたちが大人になったとき、自分の子どもに

伝えたい「夢のおせち」をつくるワークショップと、おせち料理を少し味わってみる試食の時間をもうけました。交流会の開催にあたっては、三重大学教育学部の先生方と学生さん、当館サポートスタッフのみなさんにご協力いただきました。

(門口 実代)

博物館資料を活用した教材の開発をしています

Producing educational materials



試行授業

新県立博物館では、学校現場と博物館を結び取り組みのひとつとして、「貸出学習パッケージ」の検討を進めています。「貸出学習パッケージ」は、実物資料を使って先生方に授業展開していただき、

子どもたちにとって身近な教室で、博物館との出会いを作り出すことを目的としたキットです。

平成24年度は、三重大学教育学部・平賀伸夫教授、学部4年生東垂水琢哉さんと共同研究を行

い、鳥類骨格標本を活用した小学4年生理科「ヒトの体のつくりと運動」の授業を開発しました。大学と博物館が互いに得意分野を活かし、ものをよく観察し考えるという、博物館ならではの「ものの見方」を体験するプログラムを考えました。

12月13日（木）に、考案したパッケージを使って三重大学附属小学校4年生の皆さんと一緒に授業を試行しました。本物の骨だと聞かされ、最初は驚いた様子の子どもたちでしたが、資料をさわって観察するという

体験を通じて、生き物のかたちと生息環境との関わりや、物事を比較する視点に気づくことが出来たようです。

今回は、標本もひとつひとつ手作りしました。標本製作の過程で、ご協力いただいた三重大生の皆さんにとっても博物館資料を知る良い機会になったのではないかと考えています。(中村 千恵)



標本組み立て作業

大学連携 皇學館大学との覚書調印式

The signing ceremony with Kougakkan University



握手を交わす布谷館長と清水学長



記者質問に答える布谷館長

平成 24 年 12 月 25 日（火）に、皇學館大学と三重県立博物館との相互協力協定に向けた覚書の調印式を、皇學館大学にて行いました。清水潔学長と布谷知夫館長にご出席いただき、和やかな雰囲気の中、調印を取り交わしました。

皇學館大学とは、今までも研究分野への相互協力や、博物館実習生の受け入れといった教育支援などで連携を行っていましたが、新県立博物館の開館を目前に控え、より強い連携体制を構築することとしており、今回の覚書調印はその為のひとつ

のステップとなっています。

新しい県立博物館は、収集保存・研究・活用発信といった博物館の機能を発揮し、三重の地域づくりに貢献することを使命としています。皇學館大学との連携を通じ、特に伊勢地域の自然や、歴

史・文化に関する調査研究の進展が期待されると考えています。

今後、定期的に連携協議を行い、具体的な取り組みを検討していきます。（中村 千恵）

里山ゾーンのヤマザクラ

Cherry blossoms in the New Museum field

ミュージアムフィールドの里山には、大小 20 本を超えるヤマザクラが生育しています。中でも、胸高直径（成人の平均的胸の高さ 1.2m での幹の直径）が 104cm のヤマザクラは、この里山最大の木として、又シとも言える存在です。この大きさのヤマザクラは県内でもそれほど多くはないと思われる。

ヤマザクラは林床が明るい里山に生育し、暗いシイ林やカシ林へと移り変わって行くと、やがて見られなくなってしまいます。ヤマザクラは、人が手を入れることで維持されているコナラ林などの里山を代表する樹種です。

ソメイヨシノを見慣れた人にとっては、花つきがよくないため華やかさを感じにくいヤマザクラですが、この里山のヤマザクラはいずれも花つきがよく、十分に華やかさを感じるほどの花を毎年

見せてくれます。

これまで暗い藪山となっていたため、やや弱っていたヤマザクラですが、新県立博物館の整備に当たって、サポートスタッフのみなさんの協力などにより、

里山の管理を進めてきたことで元気を取り戻しつつあるようです。今後、さらに華やかにヤマザクラが咲き誇ることを期待しています。

（松本 功）



花付きのよいヤマザクラ

お問い合わせ

三重県環境生活部新博物館
整備推進プロジェクトチーム

〒514-0006 三重県津市広明町 147-2
三重県立博物館内

TEL : 059-228-2283 (代表)
FAX : 059-229-8310
E-mail shinhaku@pref.mie.jp

新県立博物館の情報は、
ホームページでご覧いただけます。

<http://www.pref.mie.lg.jp/SHINHAKU/HP/>